

多摩川（神奈川県、東京都）

多摩川は延長 183 km、水源を山梨県と埼玉県の県境に位置する笠取山山頂とし、東京都と神奈川県の間を通過して東京都大田区と川崎区との境で東京湾に注ぎ込む 1 級河川です。私は 6 歳から 15 歳まで神奈川県川崎市多摩区が多摩川から程近い地区に住んでいました。そのため、小学生のころは川岸へ行く機会が多々ありました。春には心地よい日差しの下、家族でバーベキューを行い、夏には花火大会にも出かけました。ある時は母と一緒に川岸での「化石探し」にも出かけました。確か、何かの貝が挟まった岩を見つけたような記憶があります。小学校では多摩川について学習する機会がありました。そのときに多摩川は昔から大雨や台風による増水で何度も氾濫し、そのたびに周辺地域に大災害をもたらしてきたということを知りました。しかし、小学生の私は川にまつわる楽しい思い出がなく、多摩川がそんなに恐ろしい顔ももつ川だということが想像できませんでした。中学生になると、通学に小田急線を利用するようになり、川崎の登戸付近の橋から毎日異なる表情をみせる多摩川を眺めることが通学の楽しみの一つとなりました。天気の良い日には川の水がきらきら光って見え、喜んでいました。しかし、毎日眺めることで新たに気がついた面は川の持つ寂しさと恐ろしさでした。



「寂しさ」というのは上流に比べると多摩川自体に自然の息吹や喜びの表情をあまり感じ取れないということです。当時、私は多摩川上流部の奥多摩湖付近の小さな渓谷を訪れる機会がありました。そのとき、私はこれがいつも見ている川と同じ川なのかとその水の美しさに目を奪われました。そして、その自然のままの形で残されたものが川本来の姿であり、いつも見ている多摩川は人間に支配された可哀想なもののように思えてきたのです。私がいつも見ている多摩川は決して澄んだ水であるとはいえ、ゴミもたくさん落ちていました。さらに、多くの場所で川の両岸は灰色のコンクリートの堤防でがっちり囲まれ、それはまるで人間が用意したレールの中をいじめられながら通っていく寂しい水流のように感じられたのでした。

「恐ろしさ」というのは、多摩川が過去に起こしてきた氾濫を現実起こったことと認識するようになったということです。幸い、私が川崎に住んでいた間は大きな災害がなかったものの、大雨の次の日の川の流れは驚くほど激しく、水量もあつという間に増えていました。その時ほど、川は「生きている」と感じたことはありません。同

時に、人間は川とうまく付き合っていかなければ、いつかしっぺ返しを食らうに違いないと思った瞬間でもありました。

では、20-30年前の多摩川はどんな様子だったのか。私は祖父母がこの地域に住んでいるわけではないので、小学校の時に近くのお年寄りに伺った話を思い出し、自分で調べたことと合わせて検証していきたいと思います。近所の方々にお話を伺った際にまず出てきた言葉、それは多摩川＝「あばれ川」であるということでした。それもそのはず、1970年代から1980年代にかけて大規模な洪水、氾濫が相次いで起こったのでした。彼らはそういった災害を実際に経験した者として、川の恐ろしさを肌を感じていたのです。度重なる水害の中でも戦後最大級の洪水と呼ばれているのが狛江水害です。昭和49年八月末日、台風16号の影響で多摩川水源地域に集中豪雨がありました。このとき、東京の狛江川側にある堤防が決壊し、堤防の裏側にあった約19戸の民家が流されてしまいました。その様子はテレビで繰り返し放送され、人々は強いショックを受けたそうです。この水害は被害住民らが多摩川の管理側である国に対して訴訟を起こす事態にまで至り、平成4年2月に住民側勝訴の判決が下されました。

また、お年寄りの方々が子供のころは多摩川の水はとてもきれいでよく泳ぎに行ったものだというお話もされていました。しかし、高度経済成長期にあたる1960年代から1970年代にかけて、多摩川は現在とも比べ物にならないほど汚れていたといえます。原因は生活排水や工場排水が多摩川に大量に流されたことでした。川の魚類は大量死し、1970年には多摩川下流系の水質がカシンベック病を誘発する疑いがあるとして玉川浄水場の取水が停止されるに至りました。その後、下水処理の技術の向上とともに、水質改善が進められ、現在ではアユをはじめとする多くの魚類を多摩川で見ることができるようまでに回復しました。この一連の経過はどんなに汚染された川でも、生物を呼び戻せるということを示す環境再生成功の事例として捉えることができるでしょう。

2007年12月、私はおよそ4年半ぶりに多摩川の調布市と稲城市を挟むあたりを訪れました。その日は天気もよく、川は穏やかな表情を見せていました。川の透明度や川岸の様子に大きな変化は感じませんでしたが、数年振りに訪れた川が同じようにそこにあったことに心がほっとした気がしました。川自体の変化ではないのですが、新しい堤防がいくつか増えているような気がしました。そこで、数多くある多摩川に関するWEBページの中でも、こうした堤防などの川の氾濫に対する災害対策は現在どのような段階にあるのかということを中心に調べることにしました。

京浜河川事務所のHPによると、現在進められている大きな事業のひとつが「スーパー堤防整備事業」だそうです。スーパー堤防とは別名「高規格堤防」と呼ばれるもので、堤防の幅を非常に広くする（堤防の高さの30倍程度）ことで、堤防の傾斜を従来よりもかなり緩やかにする堤防のことです。そして、このスーパー堤防の長所は大きく3つあるといえます。①越水しても壊れない。②浸水しても壊れない。③地震に強い。1つ目の利点は堤防の傾きが穏やかであるため、たとえ川の水が堤防の上を越えて

きても水が緩やかに流れていくということです。これによって、今までのように越水と同時に堤防が決壊し周辺の家々を一気に飲み込むといった悲劇を防ぐことができます。2つ目利点は、堤防の幅が広いため、たとえ川の水が堤防に浸水しても堤防が決壊する恐れはないということです。3つ目の利点はスーパー堤防を作るにあたり、土地の性質に合わせて行う地盤改良などにより、液状化やすべりに強い堤防を作ることが可能であるということです。また、家々の土地がスーパー堤防と一体化していることで強い地盤が作られるという点も挙げられます。これだけの利点があるスーパー堤防ですが、その実現までの道のりは決して平たんではありません。この工事計画を始めるには、まずは沿川の各自治体と河川事務所が話し合いの話し合いから始めるのですが、スーパー堤防を作るには多くの住民に仮移転してもらわなくてはならないため、住民の理解を得ないことには何も始まらないのです。ましてや、これだけ大規模な工事を広範囲にわたって行うわけですから、融資優遇制度などがあるものの、タウンミーティングなどで全ての人の了解を得るのは非常に困難に違いありません。この計画は河口から東京都日野市の日野橋までの区間で行われており、平成19年3月時点では10地区が整備済み、4地区が事業中とのことです。多少の問題はあるけれど、私はスーパー堤防には安全面意外にも利点があると考えます。それはスーパー堤防の上に川を中心とする町のコミュニティが以前より増えることや、緩やかな傾斜により川へのアクセスが容易になることで、人々が多摩川を訪れる回数も増えるだろうということです。多摩川と接する機会が増えることで、人々が自然を守っていく大切さをより強く感じるこゝへつながっていくと思うのです。これは、住宅地や工業地帯で自然が少ない多摩川下流地域において、特に重要なことだと思います。私が小学生のころに実際に川へ行って川岸で生きている自然に出会ったように、もっと多く人が多摩川を楽しめれば、そんな川を汚してはならないという思いが芽生えるに違いありません。

私が望む多摩川の姿、それは長い将来にわたって人間と共生していける川であってほしいということです。普段はあまり意識しないけれど、川は私たちの生活にたくさん恩恵をもたらしてくれる存在です。その水はたくさんの支流、用水路を通じて農業にも使われる私たちの生活に不可欠な生命線です。また、私たちは多摩川から都会において貴重な自然を感じることもできます。それは人々の癒しとなり、また進む環境破壊を止めようという気持ちの促進にもつながります。ただし、人間が一方的に川を利用しては、共生とは呼べません。堤防を作るにしても、必要以上にコンクリートで固めることにより、鳥が止まって休む場所を奪ってしまったりは川が本来もつはずの生き生きとした状態を失ってしまいます。川から自然的要素をできるだけ減らさないように、人々はこれからも川を見守っていく必要があるでしょう。

参考 Web Page

「京浜河川事務所」 <<http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/tama/index.htm>>

「NHK さわやか自然八景」 <<http://www.nhk.or.jp/sawayaka/tamagawa.html>>

公開 OK (匿名で)